



 Data	2023-31
監督・脚本：リー・ルイジュン (李睿珺)	
出演：ウー・レンリン (武仁林) / ハイ・チン (海清) / ヤン・クアンルイ (楊光銳) / チャオ・トンピン (趙登平) / ワン・ツァイラン (王彩蘭) / ワン・ツイラン (王翠蘭) / シュー・ツァイシャ (舒彩霞) / リウ・イーフー (劉懿虎) / チャン・チンハイ (張津海) / リー・ツォンクオ (李增国)	

## 👁️👁️ みどころ

この邦題は一体ナニ？この原題、この英題はナニ？中国では近時、戦争映画大作の大ヒットが続いているが、「映画監督の仕事は本質的に農民の仕事と似ている」と語るリー・ルイジュン監督の本作が、“奇跡の映画”とまで呼ばれて大ヒットしたのは一体なぜ？

パール・バックの『大地』（31年）では、貧農の主人公が少しずつ土地を獲得していったが、本作の主人公は借りた農地で、ロバを引き、小麦を作るだけ。しかも、本物の農民が主人公を演じているから、いくらセリフが少ないとはいえ演技は大丈夫？また、せっかく“国民の嫁”と呼ばれる美人女優を起用しながら、身障者の妻はところ構わず小便を漏らす厄介者だから、アレレ、アレレ。

他方、家族から厄介払いされる形で結婚したこの夫婦が見せる新婚初夜の姿、借りた卵をひよこにし、さらに卵を産むニワトリにしてい姿、大切なロバを引く姿、マイホームを自力で建てる姿、等々は、まさに本物！『生きる』（94年）では、娘を失っても、グォ・ヨウとコン・リー演じる夫婦は天寿を全うしたが、さて本作では？

邦題と原題の意味を考えながら、本作ラストの尻切れトンボ的な結末（？）の意味をしっかりと考えたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■タイトルの意味は？邦題 VS 原題 VS 英題を比較！■□■

本作の邦題は『小きき麦の花』だが、原題は『隠入尘烟』、そして英題は『RETURN TO DUST』だ。本作の少し前に観た、第8世代監督、仇晟（チウ・シヨン）の『郊外の鳥たち』（18年）は珍しく原題、邦題、英題が全く同じだったが、本作のそれは似ているよう

で、微妙に違っているなので、その異同に注目！

まず、原題の『隠入尘烟』は、「ほこりや煙に紛れて隠れる」という意味で、英題の『RETURN TO DUST (塵に帰る)』に近いが、微妙に違うらしい。その点について、リー・ルイジュン監督はパンフレットの中で、「誰もが塵のように、大地の上で生きています。しかしその塵煙の香りこそ、生活の香りでもあります」「“隠入尘烟”とは、一切の物事は最終的に陳腐な日常に埋もれ、時間の層の中に隠れてしまうけれど、一方でそれらは生命と同じく変化の相を秘めていて、目に見えずひっそりと新たな変化を始めており、日常のあらゆる瞬間で私たちに寄り添ってしてくれる、ということを表しています」と解説している。なるほど、なるほど・・・。

他方、邦題の『小さき麦の花』と聞けば、キリスト教徒でなくとも、「一粒の麦、死なずば」の言葉を思い出す。これは、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」という意味の、奥深い言葉だ。さあ、本作の邦題、原題、英題が前述のとおりにされたのは、なぜ？

## ■時代設定は？舞台は？■

本作の時代設定は2011年。舞台は中国西北地方の農村とされている。もちろん、本作を理解する上ではそれで十分だが、正確に言うと、舞台はリー・ルイジュン監督の故郷である甘粛省張掖市の花牆子村だ。中国では、西安、北京、洛陽等の昔から都が置かれた大都市があるし、改革開放政策によって急激に発展した、上海、厦門、珠海、深圳等が大都会になっているが、内陸部の発展は遅れている。都市住民と、いわゆる農耕民との格差も歴然としている。

パンフレットによれば、花牆子はシルクロードの要衝で、古くはオアシス都市として栄えた土地。周囲にはゴビ砂漠が広がっており、気候は乾燥している。花牆子は漢民族の村だが、付近には監督の過去作『僕たちの家に帰ろう』（14年）の主人公たちと同じユグル族やチベット族、回族なども暮らしている。王兵（ワン・ビン）監督が『無言歌』（10年）『シネマ28』（77頁、『シネマ34』（281頁）等で迫った反右派闘争時代の労働改造所「夾辺溝農場」は、ここから100kmほど西に行った場所にあるそうだ。まずは、本作が設定している2011年当時の花牆子村の姿をしっかりと確認したい。

## ■2人の主人公は？■

本作の2人の主人公は、馬有鉄（マー・ヨウティエ）（武仁林／ウー・レンリン）と曹貴英（ツァオ・クイイン）（海清／ハイ・チン）夫婦。夫のヨウティエは、マー家の四男だ。両親と2人の兄は他界し、今は三男、有銅（ヨウトン）（趙登平／チャオ・トンピン）の家で暮らしているが、自分の息子の結婚を心配するヨウトン夫婦にとってはヨウティエは厄介者らしい。他方、妻のクイインは内気が極端なうえ、体に障害があるためか、ところか

まわす小便を漏らしていたから、アレレ……。こちらもヨウティエ以上の厄介者だ。

したがって、この2人が見合いをして結婚したのは、互いの家族が厄介払いをするためだったらしい。激動する中国の近代史の中をたくましく生き抜いていく夫婦愛を描いた、張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『活きる』（94年）（『シネマ2』25頁、『シネマ5』111頁）は、夫役・葛優（グオ・ヨウ）の演技力と、妻役・鞏俐（コン・リー）の美しさが際立っていたが、同じく夫婦愛を描く本作では、夫も妻も揃って厄介者だから、これから先が大いに心配だ。2人は出稼ぎに出た村人の空き家で暮らしはじめたが、そんな夫婦の新婚初夜の風景はかなり異様……？

## ■□■第5世代監督の名作を彷彿！なぜ本作が大ヒット？■□■

パール・S・バックの名著『大地』（31年）は、大地に生きる貧農夫婦の一生を描いた一大叙事詩。また、1980年代に「中国映画ここにあり！」を全世界に発信した、第5世代監督による『黄色い大地』（84年）、『紅いコーリャン』（87年）は、壮大なドラマの中で、貧しいけれども中国の大地を生き抜く庶民の姿が描かれていた。しかし、改革開放政策の下、急成長し、今や米国と覇権を争うまでの経済、軍事大国になった中国は、『戦狼2』（17年）（『シネマ41』136頁、『シネマ44』43頁）、『1950 鋼の第7中隊』（21年）（『シネマ51』18頁）等の戦争映画大作を大ヒット増産中だ。そんな中、2011年の中国西北地方の農村を舞台にした本作が、2022年の第72回ベルリン国際映画祭での金熊賞こそ逃したものの、“奇跡の映画”と呼ばれて中国で大ヒットしたのは、一体なぜ？

スクリーン上では、互いに家族から厄介払いされて結婚したヨウティエとクイインの2人が力を合わせてロバを引き、ニワトリを育てながら、借りた農地の上で小麦を育てる風景が淡々と描かれていく。本作でクイイン役を演じているハイ・チンは、本来“国民の嫁”という異名で親しまれている美人女優だから、本作でのこれほどまでの大胆な挑戦（変身？）にビックリ！他方、本作でヨウティエ役を演じているウー・レンリンは、本作の舞台となった甘粛省の村で実際に耕作を営む農民で、リー・ルイジュン監督の叔父（叔母の夫）に当たるそう。なるほど、本作のヨウティエ役にはセリフがほとんどないから、この役は素人でも演技OK！

## ■□■農地は？建物？農村改革とは？この風景に注目！■□■

『大地』の主人公は、安徽省に住む貧農の王龍（ワンロン）。彼は勤勉だったから、到底美人とは言えない阿蘭（オラン）と結婚した後、少しずつ地主の黄家から土地を買っていたし、子供にも恵まれていた。それに対して、本作の主人公ヨウティエが懸命に小麦を育てている農地は広くはないから、収穫した小麦を売っても土地を買う余裕など全くなさそう。

ちなみに、本作では、貧農のヨウティエと対照的に、豪農のチャン・ヨンフー（張永福）の息子（楊光銳／ヤン・クアンレイ）が登場するので、その対比に注目！チャン・ヨンフーは、都市に出て金を稼ぐ働きざかり世代の人々が残していった田畑の経営権を借り受けて集約的な農業を行って財をなしたらしい。もっとも、入院しているため働けない彼は輸血が必要だが、彼の血液型は、極めて珍しい Rh マイナス。そんな彼に輸血できるのは、村で唯一、“熊猫血（パンダの血）”と言われるほど希少価値のある Rh マイナスの血液型を持っているヨウティエしかいなかった。そのため、ヨウティエは何度もこの“旦那”のために輸血を強いられる（？）が、それも豪農 VS 貧農の格差が大きい中国の農村部ではやむを得ないようだ。

他方、農村改革の一環として、2011年当時の中国政府は順次古い家を壊し、農民を新しい高層共同住宅に移住させようとしていた。そのため、空き家にヨウティエを居住させていた家主も、政府からの補償金ほしさに、ヨウティエに対して、「すぐに家を出ていってくれ。空き家はいくらでもある」と追い立てたから、さあ、ヨウティエはどうするの？

賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督の『長江哀歌（ちょうこうエレジー）』（06年）（『シネマ15』187頁、『シネマ17』283頁）で見た、三峡ダムによって水没していく町の悲劇は国にとっても深刻な問題だが、本作に見る農村部の建物の取り壊しは国家にとっては、些細なこと。しかし、ヨウティエ、クイイン夫婦にとっては大問題だ。そう思っていると、本作には、ヨウティエがクイインの協力を得て自分たちだけで家を建ててしまう風景が登場するので、それに注目！この家作りの作業は、①近くの土地から粘土を掘ってきて、それで日干し煉瓦を作る、②廃材で柱を作る、③煉瓦を積み上げて壁を作る、④筵で屋根を葺く、というものだが、ろくに学校にも行っていないヨウティエにこんな作業ができることにビックリ！これぞ中国、これぞ庶民の底力だ。もっとも、たくさん作って一面に並べていた日干し煉瓦が、突然の大雨に襲われると・・・？逆に、そんな不運を乗り越えて、共同作業によるマイホームを持った時の2人の幸せぶりは・・・？

### ■□■この夫婦なりの“愛の語らい”も少し見えたが・・・■□■

本作はチラシにもパンフレットにも、「愛という言葉は一度も出てこないけれど。」のフレーズが躍っている。「I Love You」はどこの国でも、いつの時代でも、決まり言葉だから、映画ではあらゆるシーンで使われている。しかし、互いに寄り添い、大地に寄り添って生きる夫婦愛をテーマにした本作には、そんな歯の浮く言葉（？）は一度も出てこない。もっとも、①クイインが真っ暗な道で心配しながら夫の帰りを待っている時、②何度も輸血を迫られる夫を見かねたクイインが「かわりに私の血を採って」と叫ぶ時、③大雨に襲われた日干し煉瓦を必死で守ろうとする共同作業の時、④近所で借りた卵から生まれたひなを、箱の中に入れて嬉しそうに観察する時、そして、⑤「お兄さんの家ではじめてあなたに会った時、お兄さんはロバを苛めていた。あなたはロバに餌をやった。その時、思ったの。この人となら一緒に暮せると」と、はじめて「I Love You」に近い言葉をクイインが

ヨウティエに投げかける時、等々に本作が描く夫婦愛の姿がくつきりと浮かび上がってくるから、それに注目！

借りていた家からは追い出されたものの、今や新居も完成し、丹精込めて作った小麦も実り、ひなから成長したニワトリもはじめて卵を産んだから、2人の幸せな農民生活はいよいよこれから本格的に……。そう思っていると、アレレ。ある日、ある事故で突然クイインは帰らぬ人に……。これはショック。さあヨウティエは、これからどうするの？

### ■□■ 貴英死亡後の有鉄の選択肢は2つ？それとも3つ？ ■□■

『活きる』では、愛する子供を失いながらも夫と妻は激動の時代を乗り越え、たくましく生き抜くことに成功。そのため、同作のタイトルは『活きる (活着)』なのだが、本作ではラスト近くに、クイインがあっけなく死んでしまうから、アレレ。愛妻を亡くした後、ヨウティエは一人で小麦を作りながら生きていくの？それとも、小麦作りを諦め、ロバやニワトリを手放し、政府が都会に建設した共同住宅に移住していくの？それとも……。？本作に見るヨウティエの選択は、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。

中国に“紙銭”という風習があることは中国映画を観ているとわかってくるし、中国語を勉強していてもわかってくる。これは本物のお金(紙幣)ではなく、紙製のお金を燃やし、先にあの世に行っている祖先たちがお金に困らないよう、煙にして送ってやる習慣だ。本作では、死んだ父母や兄弟のため、ヨウティエがクイインと一緒に紙銭を燃やすシーンが二度も登場するから、ヨウティエにとって紙銭は死者との通信手段として身近なものだったのだろう。

しかして、丁寧にクイインを埋葬した後、ヨウティエは村人たちに対する種もみ代金の返済や、今はひよこからニワトリに成長している、あの時に借りた10個の卵の返済等を次々と済ませていたから、アレレ。これは一体何のため？もともと人付き合いの悪いヨウティエだから、そんな姿を見ても私は気に留めなかったが、自宅に戻ったヨウティエがクイインのために設けた祭壇の前に1本のガラス瓶を置いているシーンを見ると、さてこれは一体ナニ？

極端にセリフの少ないヨウティエの演技もクイインの演技も見事なものだが、この2人のココロを私たち日本人観客がどこまで理解できているのかはかなり微妙。そんな時、本作のパンフレットにあるリー・ルイジュン監督のインタビューと、クイイン役のハイ・チン、ヨウティエ役のウー・レンリン両人のインタビューが参考になる。本作ではさらに、それ以外にも、①藤井省三氏(名古屋外国語大学教授、東京大学名誉教授)の“「小さき麦」を植える有鉄は現代の阿Qか？—「低層叙述」映画に花開く一粒の愛の詩」、②井戸沼紀美氏(映画上映と執筆『肌蹴る光線』主宰)の「あっけなく直立していく世界の中で」、③川本三郎氏(評論家)の「ロバとブルドーザー」も大いに参考になるので、それらは必読！

### ■□■ こんな農村映画がなぜ大ヒット？なぜ上映打ち切り？ ■□■

1980年代に、チェン・カイコーの『黄色い大地』、チャン・イーモウの『紅いコーリ

ヤン』がなぜ全世界に衝撃を与えて“中国ニューウェーブ”と呼ばれたの？また、それに続くチャン・イーモウの『菊豆』(90年)や『活きる』(94年)、チェン・カイコーの『さらば、わが愛／霸王別姫』(93年)や『始皇帝暗殺』(98年)、ウー・ティエン・ミンの『古井戸』(87年)、シエ・チンの『芙蓉鎮』(87年)、ティエン・チュアンチュアンの『青い罌』(93年)等々が次々と大ヒットしたのは一体なぜ？それは、中国映画特集である『坂和的中国電影大観 SHOW-HEY シネマルーム5』をしっかりと読んでもらえばわかるはずだ。

他方、改革開放政策が始まる以前の1970年代の中国は貧しかったが、それから40～50年後の今の中国は急成長し、軍事的、経済的に米国と覇権を争うまでになっている。そして、『戦狼2』『1950 鋼の第7中隊』等の戦争大作を増産し、大ヒットさせている。そんな中、2011年の西北地方の農村を舞台にした何とも地味な本作が、2022年のベルリンで金熊賞こそ逸したものの、“奇跡の映画”と呼ばれて大ヒットしたのは一体なぜ？それをしっかり考えたい。もっとも、『キネマ旬報』2023年3月下旬特別号の「第2章 世界のヒットランキング&映画界事情」の新田理恵氏の「中国 コロナが劇場経営を圧迫 輸入映画も激減」によれば、「本作はもう1つ、上映が突然打ち切りになったことでも話題になった。9月下旬、劇場公開だけでなくネット配信も打ち切られたのだ。10月の中国共産党大会を前に、貧困描写など政府のキャンペーンと相容れない内容が問題視されたのではという臆測もあるが、理由は説明されていない。」と書かれているので、それにも注目！それは一体なぜ？

2023（令和5）年3月13日記

『日本と中国』2275 (2023年4月1日)

小さき麦の花  
全国順次公開中



©2022 Qbei Films Limited, Beijing JQ Spring Pictures Company Limited. All Rights Reserved.

監督：リー・ルイジュン  
出演：ウー・レンリン、ハイ・チン  
原題：塵入塵煙 / 英語題：RETURN TO DUST / 2022年 / 中国 / カラー / 133分 / G  
字幕：磯尚太郎  
字幕監修：樋口裕子  
配給：マジックアワー、ムフイオラ  
公式サイト：  
<https://moviola.jp/muginohana/>



パール・バックの『大地』(31年)は、大地に生きる貧農夫婦の生を描いた大叙事詩。第5世代監督による80年代の『黄色い大地』『紅いコリーヤン』は、壮大な歴史ドラマの中をたくましく生き抜く庶民の姿を描いた傑作だ。しかし、改革開放政策で急成長し、米国と覇権を争うまでの経済・軍事大国になった中国は今、『戦艦2』(17年)、『1950 鋼の第7中隊』(21年)等の戦争映画大作を増産中だ。そんな中、2011年の西北地方の農村を舞台にした何とも地味な本作が、ベルリンでの金熊賞こそ逃したものの、奇跡の映画と呼ばれて大ヒット！『塵入塵煙』は「ほこりや煙に紛れて隠れる」という意味で、創世記3・19の「あなたは塵だから塵に帰らなければならぬ」とを連想！英題の『Return to Dust』も似たものだが、その異同は？他方、ヨハネの福音書12・24の「一粒の麦が死なずば」を

なぜ2011年の農村を舞台にした現代版『大地』が大ヒット？  
— 『活きる』とは異質の、この夫婦愛に感動！邦題の意味は？ —

想起させる邦題は、激動する近代史の中を生き抜く夫婦愛を描いた『活きる』(06年)は賞優の演技力と筆削の美しさが際立っていたが、同じく夫婦愛を描く本作の有鉄は周囲から力にだされている貧農の四男。妻の貴英は隣事者ぐいとも小便を漏らしているからアッ！本作では、互に家族から厄介扱ひされて結婚した二人が口八を引き、二ノトリを着てながら、借りた農地で黙々と小麦を育てる風景に注目！セリアはほとんどないから、有鉄役はスアの素人でもOK？  
賈樟柯監督の『長江哀歌』(06年)に見た三峡ダム建設で水没していく町は深刻だが、農村改革に伴う有鉄の家の取壊しは小事。新居を築くべく自力で土を捏ね屋根を葺く夫婦の姿は、これを庶民の底力だ。ある日ある事故で妻を失った彼は町へ行くの？それとも…？今の中国でこんな農村映画が大ヒットした意味をじっくり考えたい。

熱血弁護士  
坂和章平  
中国映画を語る(73)



映画を語る「シリーズ」をはじめ映画に関わる著書数多。公社日本労働会連合会 NPO 日本映画協会 監理委員。

(さか・しゅへい)  
1949年愛媛県松山市生まれ  
大阪大学法学部卒 都市圏別に関わる議論を数々手分け、日本郵政計画学会 芸山賞 同年日本労働連合会「東洋労働」を愛読 居組的 映画家 2004年『ナニワのオッサン』弁護士